



スーパー グローバル ハイスクール

# 佐高 SGH通信 2018

No. 20 (平成30年11月 8 日発行)

## 「田中正造の日 環境フェスタ」参加 北海道佐呂間町を訪問して学んだこと



北海道佐呂間町の先人の遺業を讃える記念碑



佐野市文化会館での発表

2018年10月13日(土)、「田中正造の日 環境フェスタ」で、科学部の田中正造記念賞の表彰に続いて、SGHクラブ国内班による「北海道佐呂間町フィールドワーク」の発表を行いました。発表者は、リーダーの新井康平君、安生温大君、大嶋由佳さん、高橋くるみさん(以上、2年生)、秋野恵理さん、大塚萌絵さん、安部悠奈さん、茂木千紘さん(以上、1年生)の班員8名です。

### Q1 なぜ、佐呂間町なの？

SGHクラブ国内班は、日本初の公害事件である「足尾鉍毒事件」の解決に向けて奔走した田中正造から学ぶため、**1年目は「福島」**(原発災害からの復興)、**2年目は「水俣」**(水俣病からの復興)とフィールドワークを行ってきました。3年目の今年は、足尾銅山の鉍毒を沈潜させるために「渡良瀬遊水地」が造られた際、集団移住を余儀なくされた**旧谷中村の住民**が開拓した「**もう一つの栃木**」と言われる「北海道佐呂間町栃木地区」を訪問し(8/6~9)、関係者にインタビュー等を行いました。



佐呂間町の町長と教育長

### Q2 なぜ、発表することになったの？

今から5年前の平成25年、佐野市で行われた「**田中正造翁没後100年顕彰記念式典**」に、佐呂間町の訪問団が参加しました。平成29年には、その返礼として、佐野市長が佐呂間町長を表敬訪問するなど、佐野市と佐呂間町との間に交流が始まりました。

今回のSGHクラブ国内班の訪問は、佐野市の紹介で実現しました。訪問先で案内していただいた**佐呂間町役場の武田温友さん**は、田中正造の命日である「106回忌法要」(9/4佐野厄除け大師)にも参加され、法要講話の講師として、佐野市との交流等を紹介されました。そして、講話終了後には佐高を訪問してくださいました。

こうした縁で、SGHクラブ国内班の「佐呂間町フィールドワーク」の様子を「**田中正造の日**」にぜひ報告して欲しいと佐野市からお話があり、今回の発表が実現しました。また、発表後には、改めて佐野市長にフィールドワークの報告を行いました(10/16)。



佐野市長に報告

### Q3 今回の発表で伝えなかったことは？

リーダーの新井康平君

「佐呂間町柵木地区には、大地に整備が行き届いた畑が広がっていた。移民者の努力が今、生きていると思った。谷中村から遠く離れた地でも、**田中正造の偉大さを後生に伝えよう**としている人たちがいることを多くの人たちに知ってもらいたかった。今回の発表は、佐野市長さんを始めとした多くの方々を前にして、とても緊張したが、このような場を与えていただけたことを感謝している。」



佐呂間町の柵木神社

# 「今に生きる移民の努力」

## 田中正造を研究

## 佐野高SGHクラブ国内班



北海道佐呂間町のフィールドワークを発表する佐野高SGHクラブ国内班メンバー＝佐野市で

公害運動に取り組んだ佐野市出身の偉人、田中正造の研究を続ける佐野高校の生徒らが北海道佐呂間町を訪れてフィールドワークを行った。町は百七十年前、足尾銅山鉱毒事件で廃村となった谷中村民らが移民した地。リーダーの新井康平君(二一年)は「大地に整備が行き届いた畑が広がっていた。移民者の努力が今、生きていると思った」と振り返った。十三日の「田中正造の日―環境フェスタ」で活動報告する。(梅村武史)

同校は国際的なリーダーをといわれる佐呂間町宇柵木に育成する文部科学省「スーパー入って柵木公民館、柵木神社」イグローバルハイスクールなどを巡り、移民者の子孫や(SGH)の指定校。同校S 関係者にインタビューした。GHクラブ国内班の八人は八 佐野市から北東へ約千キロ。人口約五千三百人の佐呂間町

### あす市文化会館で活動報告

## 北海道佐呂間町を調査



町の開拓資料館を見学する佐野高SGHクラブ国内班＝北海道佐呂間町で(同校提供)

はオホーツク海に面した道東地区にある。一九一(明治四十四)年、谷中村を含む渡良瀬川流域町村民は北海道への移住をあっせんされ、第一陣で六十六戸約二百四十人が集団移住した。現地は三方を山に囲まれた原野で、寒さとヒグマの襲来におびえながらの開墾だったという。

「正造の偉大さを口にされたい。こんなに遠い地でも知られていて、うれしかった。高橋くみみさん(二〇)同(二一)は川根章夫町長との懇談に触れ、

移民四世の阿部隆文さん(四二)から話を聞いた秋野恵理さん(二〇)は「一年」は「移民者は日当たりがいい肥沃な地という話を信じて来たという。さぞ悲しかったでしょう」。大嶋佑佳さん(二〇)は「一年」は川根章夫町長との懇談に触れ、

「正造の偉大さを口にされたい。こんなに遠い地でも知られていて、うれしかった。高橋くみみさん(二〇)同(二一)は川根章夫町長との懇談に触れ、

「正造の偉大さを口にされたい。こんなに遠い地でも知られていて、うれしかった。高橋くみみさん(二〇)同(二一)は川根章夫町長との懇談に触れ、



「牧場の大きさが想像以上。昔の柵木の人は頑張ったんだな」と思った。

現在、残る移民世帯は三戸のみ。町は過疎化に悩んでいるという。安生温大君(二〇)同(二一)は「移民から百周年(二〇一一年)の節目に佐野市との交流が始まったとうです。もっと交流が深まるといい。」

茂木千紘さん(二〇)は「一年」は「ホタテ、カキを養殖しているサロマ湖は本当に美しい。佐野市民にぜひ見してほしい」と話していた。

発表では、フィールドワーク報告に加え、住民の移住を余儀なくされたという点で共通する福島原発事故と足尾銅毒事件を比較し、提言も行う。「環境フェスタ」は十二日午後一時半から佐野市浅沼町の市文化会館小ホールで開かれる。入場無料。発表は午後二時五十分ごろからの予定。

◇

十二日は佐野市が制定した「田中正造の日」。正造の本葬が一九一三年十月十二日、同市の「惣宗寺」で営まれたことにちなむ。県指定史跡「田中正造旧宅」(小中町)が臨時開館し、入場無料に。正造の自伝や日記、書簡、遺品など約一万点の資料を収蔵する市郷土博物館(大橋町)も入館無料になる。